
罪sai -No.2045-

塩冷 津

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪 s a i - N o . 2 0 4 5 -

【Nコード】

N 5 9 2 4 X

【作者名】

塩冷 津

【あらすじ】

前に書いていた『罪』ですが、書き直そうと思い、今になります。

% 1 (前書き)

久々に更新します。

『こんなはずじゃなかったのに…』

…眠たい。いつそのまま眠っていたい。

薄暗い闇の中で私は目を覚ます。堅いベッド、剥き出しのコンクリート。何もかもがいつも通りだ。

その闇の中で体を起こす。回りを見渡すと、くきつと首の骨が鳴った。気持ちがいい。

「…ふああああつ」

のんびりと欠伸をし、鉄格子の扉を見る。パンの一切れがそこにはあった。水が欲しいところだったが、あいにくこの部屋には飲める水がない。仕方なくそのパンを手を取った。

「はあ」

ため息を漏らしながら私は、そのパンを一かじりする。やっぱり水が欲しい。でも無い。

「配給当番め。水を忘れやがったな」

水を諦め、私は数少ない食料をちびちびと食べた。

「…今日も何も無いのかな？ まあ、いつも通りだけどね」

そう呟きながら寝転ぶ。手足に付いた鉄はいつも通り重い。

すると、外からかつかつかと誰かが近づいてきた。見張りだろう。

気にせず寝返りを打って寝転んでいると、その足音が私の所で止まり、のしつと座ったような音が聞こえた。

何だろう。私がそう思っていると

「なあ」

と、見張りが話してきた。

声は、少し低めの男性の声だった。

私はその言葉を無視する。話していると、体力の無駄だからだ。

「聞いてるなら勝手に話すぜ？」

「……」

ちらつと私はその男を見た。見たことのない見張りだった。新入りだろうか。

「あんたが俗に言う『異端者』か？」

「……」

ちよつとだけこくつと頷いてみた。

「そうか」

通じたみたいだ。

「こんな可愛い女の子までもが、こんな仕打ちされてるんだな」

「……」

そついえば、私、女だったんだ。そんな普段考えないようなことも今考えた。

「水飲むか？」

「えっ」

水という言葉に私は思わず反応して起き上がった。

「やっと起きてくれた」

そんな私を見て男はニツと笑い、鉄格子の中に水の入ったボトルを置く。

私はそれを取り、ぐびぐびと水を飲んだ。

「おお、いい飲みっぷりだな。ハハハ」

水を飲んで気力が戻った私は聞いてみた。

「あなたは？」

「俺は見張りさ」

即答された。でも、男は言葉をつづける。

「いやさ、お前が丁度俺の息子と同じ年頃なんだよ。だから気になつて…な。ここの見張りと替わってもらった」

「…そう」

男は淋しそうな目で天井を見た。私も釣られて見る。ただの剥き出

しのコンクリートだった。

「さて、そろそろかな？」

そう言った途端にとてとと小さな足音が聞こえた。

「とーさん！」

男の子の声だった。私とあまり変わらない男の子が見張りに抱きついていた。右手には赤い花を持っていた。

「もう帰るよ」

この言葉はどっちに言ったのかが分からなかったが。とりあえず「はい」と言う。

「君だれー？」

男の子が私に聞いてきた。

「私は…名前ないの」

嘘ではない。それに男の子が反応して

「えー名前無いの？ 僕は東って言うんだー」

「東ね、覚えておく」

生きていたらただけど。という言葉は出さずにしておく。

「でも、名前聞いてないから不公平だよ。僕が名前決めるよ」

「おいおい東」

見張りがなだめるが聞く耳を持つとしないのでうーんと東が悩む。

そして、東はその手に持っていた花を見張りに見せて

「この花何？」

「…これは『椿』って言うんだよ」

「じゃあ、君の名前『椿』でつけてー！ よろしくね椿！」

「え、あ、うん」

東が『椿』という花を私に渡しながらそういう。突然で反応できなかったが、名前が無かった私にはとてもうれしかった。

見張りはそんな東と私を見て、紙に何かしら書きだし、書き終えたかと思うと私に渡してきた。

その紙には住所が書かれていた。

「…これは？」

「もし、ここから出れたならここに来るといい。持て成すよ」「
いまいち何かが分からなかったが、ありがとうと小声で言った。
そして、二人は帰って行った。」

数年後、ある事件が起き私は脱獄に成功

% 2 (前書き)

ねむたいですしおすし

目が覚める。そこは、いつも通りの場所ではなかった。天井が無く、蒼い『空』というものが広がっている。体を起こす。ぐっと伸びをする、体中がぺきぺきといい音を鳴らした。辺りには見たこともないようなものがいっぱいある。

さて、近いかな？と思いつつ一枚の紙切れを取りだす。拾った地図と合わせると、現在地である、三月公園というところの付近にあるみたいだ。

「さて、行きますか」

私は立ち上がって地図を頼りに歩き出した。やっぱり周りには見たことのないものばかりだ。

「あのこどうしたのー？」

「見てはいけません！」

子供が私に指をさして言う、その親であろう女性が子供の手を強めに引いていく。

私自身、自分がどんな姿をしてるのか分からない。

「……早く、東に会いたい……」

そんな言葉が自然と出てた。

周りに注目をされながらも一つの家に着いた。周りの家より少し大きいもので、名前が森澤となっている。私は紙切れと名前を3往復見た後、呼び出しのベルがあったのでそれを押した。ピンポンと軽快な音をたてる。ガチャリとドアが開き、中からあの見張りが出てきた。驚いている半分と嬉しさ半分といった顔だった。

「椿ちゃん？」

「うん」

確認するように聞いてきたので即答した。見張り、東の父はにっと

笑い、手招きをする。

「ようこそ、我が家へ」

私は小さく頷き、東の家へと入った。

玄関は靴箱とちよつとした飾りがあるだけだった。

「あら？この子が？」

入ると、中で一人の女性が立っていた。お淑やかな感じの綺麗な女性だ。

「そつだ」

東の父がそついうと、女性、東の母であろう人が笑顔になり私の手を握ってきた。

「やつと女手が増えるのね」

「えっ」

そんな情けない声が出た。女手が増えるとはどういうことだろうか。

「やだかわいいわあ」

「その辺にしとけ、風呂入らせないと」

「風呂？」

ここで聞き慣れない言葉を聞く。それを反射的に質問していた。

「一緒に入ってやってくれないか？」

「いいわよー」

東の父は私の言葉を無視しそつ頼む、東の母は軽快に引き受ける。

そして、私を抱きかかえて歩き出した。

「え、ちよっ」

また、情けない声が出たが、彼女は鼻歌を歌いながらギュツと私を抱いてある部屋に持って行かれた。

「はーい脱いで脱いでねー」

そついうと、私の服をおもむろに脱がし、私を裸にした。鏡に私の全体が映った。

髪はロングで銀髪、目は少し大きく碧眼、体が小さくやせ気味で胸が全然なかった。服は白のワンピースだったらしい。

私は自分自身の体を全く知らなかった。

「かわいいーでも臭うねえー」

東の母はぎゅーっと私を抱き、クンクンと私を嗅ぐ。彼女から甘い匂いがした。

「甘い……」

そんな言葉が出た。その言葉に東の母がにっこり笑い、私を抱えて『風呂』に入った。

暖かい水で体中を流された。頭、肩、背中、胸、股、足の順番に。私を椅子に座らせた後、もう一度頭に水を浴びせられ、謎の液体で『ごしごし』と頭を搔かれる。

「あうあうあうあう」

「ふふふ。かわいいわね」

そんな声が出ると、東の母は笑いながら私の頭を搔いた。

水をもう一度頭からかけられ、その後、変な液体で顔をくしゃくしゃとされたり、体を『ごしごし』と洗われたりした。股のところを『ごしごし』されたときに変な感じになったが気にしないでおく。

そして、お湯のたまった中に放り投げられ、彼女は自分を洗い出した。

「むう……」

私はジト目で彼女を見た。なんでこんなに荒っぽくされたのか、分からない。でも、妙に体がスツキリする。

「椿ちゃんってさ」

「む？」

彼女がいきなり話を切り出す。その言葉に変な声でしか反応できなかった。

「……やっぱいいや。かわいいからね」

「……」

何を言いたかったのかが分からない。でも、一つ言えるのが、眠たくなってきた。眠りたい。私はウトウトし始めた。

「あら、眠たいのね。ちょっと待って、東にも会わせるから」

「ん!？」

「あらあら」

東という言葉に思わず反応し、立ち上がる。眠気が飛んだ。早く東に会いたいという思いでいつぱいになる。

「まだ、帰ってこないからゆっくりしなさい」

「……はい」

私はしゅんとなりながら水に浸かった。

%3 (前書き)

眠たいです。

今さらですけど、無断転載禁止です。

東の母と一緒に風呂に入った後、ふかふかした椅子に座っていた。あの二人もそれぞれで何かをしている。私は、目の前の『テレビ』という薄い箱のようなものを見ていた。これがとても面白い。

「ふふつ、そんなに釘付けなんて、やっぱかわいいわあ」

なんか、聞こえた気がしたが気にしないでおく。やっぱ面白い。

「お、そろそろ帰ってくるかな」

「ん？」

東の父が何か言ったが聞き逃したので、反応で返す。

「東のことよ」

私はぼつと東の母を見た。

「ほんとに!？」

思わずそんな言葉が出た。何だろう、早く会いたいという衝動に駆られてすごくうずうずする。東の母は何かの本を見ていた。表紙には「男をイカせる100の方法 two出版」とかいう名前が書いてある。何の本だろう。

「おい、かあさん、そんなものまた読んで」

東の父が食器を洗いながらそう東の母に注意する。それに東の母が「いいじゃない、あなたにも試すわよ」

と反論した。なんだろ、余計に気になっちゃおう。

東の父が「やめろ」と受け流して、目の前の作業に戻る。

すると、玄関の方でがちやりと音が鳴った。もしかして。

「ただいまー」

声変わりはしているものの昔の声の面影は残しており、知っている声を発した人物がこの部屋のドアを開けた。

知っている。いや、追い求めて来たんじゃないか。彼を、東を。目の前には私が一番会いたかった人物がそのには居た。顔は少し童を残しているものの、端正な顔立ち、髪は黒の短髪、目は少しつって

いて瞳は黒、昔より成長している。そんな彼とやっと再会できた。
「あずまああああ!!!」

私は思わず東に飛び、抱きついた。もう、嬉しくてたまらない。会いたかった、会いたかった、会いたかった。

「のわっ!」

どでーんと豪快に倒れ、倒れた東の体をギュツと抱きしめた。

「あわわわわわわ」

東が慌てている。そんな光景を見てた東の母がくすくすと笑う。

「意外と積極的なのね」

「ころころ」

二人は笑顔で私たちを見ている。私はというと、まだ、東を抱いていた。

「わわわわ」

東だけ、ただただ慌てていた。

さっきの椅子に、私と東が並んで座っている。東がバツが悪そうに切り出してきた。

「……椿、あまり成長してねえんだな。昔のままみたいだ」

「うーん……私も自分の外見全く知らなかったからさ、成長してるかどうか分からなかったんだよね」

「そ、そうか……」

私が東を見つめて話してみると、顔を赤くしてそっぽを向いた。何でそっぽを向かれたのかが分からないけど、やっぱり、東いるとなんだか落ち着く。東の母がそんな私たちを見て、また、くすつと笑った。

「ねえ、椿ちゃん」

「はい?」

私は東の母の方を向く。東がふうと詰まった空気を出すような音を出した。

「私のことは『お母さん』って呼んでいいからね」

「……えっ？い、いいの？」

「そうだな、この際俺のことも『お父さん』って言っていていいんだぞ」
東の父もそう言ってきた。正直、私は嬉しいのだけど、親がいなかった私にとってはどう接すればいいのかが分からない。東の方を見る。

「言えばいいよ。二人も喜ぶから」

「え、じゃあ。……お父さん。お母さん？」

「きゃああああ、かわあいいいいい！へぶっ」

「うるさい。でもいいな、義娘にお父さんって言われるのは」

お父さんはお母さんの頭をぺしっと叩いた後、ぐでえとにやけた。

……義娘？

「親父、どういうことだよ。義娘って」

「えっ、だって、椿ちゃんはお東の許嫁になるんだよ。これから」

「はいはい、許嫁ね……ええええ！？いたっ！」

東が叫ぶながら立ち上り、すねをテーブルにぶつけた。許嫁ってなんだろう。気のせいかな、東の顔がすごく赤い。そんな状態で、また叫ぶ。

「お、おおお俺はべつにいいけどもよ、椿がい、嫌じゃないのかわ？？」

「何か分からないけど、私は嫌じゃないと思うよ」

「ほら、本人も嫌って……ええっ！？……いいのかよ、俺で？」

「うん！」

何言ってるかさっぱりだけど、私は東を嫌わないし、東と一緒に入れるならこんなにも嬉しいことはない。すると、さっきまで倒れていたお母さんが立ち上がり、東のように叫びだした。

「えんだあああああああ！いたっ」

また、お父さんが叩いた。

「ほ、本当に俺でいいんだな？」

「ん？うん。いいよ」

東が聞いてきたので私は即答した。心なしか、東がえへへといった顔になっていた気がした。

「じゃあ、これから。よろしくな？」

「うん！」

私は、大きく頷いた。

% 4 (前書き)

ゆびが痛い。

その夜、私と東はお母さんに押され、東の部屋に来た。お母さんが出るとき、東に何かを渡した。東がすごく顔を赤くして

「ば、ばつきやるー！」

と、叫びながらお母さんを押し出す。出るときにお母さんの顔がにやけているのが見えた。何を渡したのだろう。

「何貰ったの？」

「っ！？ばっ！な、なんでもねーよ！」

東がすごく顔を赤くしてそのものをゴミ箱の中に入れる。なんか、正方形で薄っぺらい袋が見えたが、何かは分からなかった。後でゴミ箱を調べてみよう。

その後、東がむすつとした顔で私と一緒に並んでベッドに座る。私はそんな東をまじまじと見つめてみると、更に顔を赤くしてそっぽを向いた。なんか悔しい。ちゃんと見てほしいのに。そう思った私は東の頭を持って、ぐいっと私の方に無理やり向けた。鼻先が当たる。東の吐息が私にあたっていた。

「お、おま」

引きつった顔でそう言った。私はじっとその黒い瞳をただただ見つめる。ちゃんと見ててほしい。そっぽを向いてほしくない。

「ちゃんと私を見て」

そう東に呟く。東は私の肩を押して、距離を離れた。そして、顔が赤いまま

「た、ただ恥ずかしかっただけだ。椿が嫌いなわけじゃない」

と、頬を掻きながら言った。よかった、嫌いになったんじゃないんだ。私は、その言葉に安心していると、自然とふわっと眠気が襲ってきた。

「ふあああっ」

「ん？眠いのか？」

うつ向き気味で間抜けな欠伸を出すと、東が顔を覗き込みながら聞いてきた。それに私は「うん」と頷く。

「ベッドどうしようか。流石に一緒に寝たくないよな？ 俺、床で寝るから毛布持つてくる」

「そういうながら立ち上がるうとしたので、無意識に手を掴んだ。」

「ん？ 椿どうした？」

「えっ、あ、いや……」

無意識でつかんだため、言葉が出ない。そんな私に東はやさしく私の顔をみる。ど、どうしよう。んーと、こ、こっとうときって。あの『テレビ』だと。

「い、一緒に。寝てほしい」

ぼそつと呟く。ただ、テレビで流れていた内容を言ったただけだったが、それを聞いた東の顔がボンと音を立てて赤くなった。

「あ、えーつと。……俺は構わんが？」

「じゃあ、一緒に寝よ？」

私と東はそのまま一緒にベッドに入る。一人用のものだったので、東と体が向かい合って密着する。私はぎゅっと東を抱きしめた。

「お、おまえ」

「えへへ」

自然とそう笑えた。東の顔は見えないが、赤くしてるのが分かった。やっぱり、東の体は落ち着く。えへへ。

そして、私はぐっすりと眠りに堕ちた。

不本意な揺れで目を覚ますと、昔見ていた天井が見えた。そう、牢獄。体を起こす。

ドゴン！

起きた直後にいきなり体が縦に突き上げられた。なんだろう。

鉄格子の外では、見張りたちが走り去っていき、罵声が聞こえる。

何が起きているんだろう。

唯一、小さな窓があるため、私はそこから外を見た。丁度、出たところが一度もないとても広いグラウンドの全貌が見えた。

そこでは、信じられない光景が。

赤髪の、少女が、無数にも見える兵隊や見張りたちをばったばったとなぎ倒している。血飛沫が上がり、その髪はそれで塗り固められたのではないかと思うほどだった。

一瞬。本当に一瞬だったのだろうか。その時間にその少女が私を見た。距離が遠すぎるため、本当に

私を見たのかは分からないが。その目は、紅かった。

がばっ！

私は反射的に体を起こす。机と筆筒があるぐらいのシンプルな部屋、ふかふかのベッド。そうだ、ここは東の部屋。肝心の東は私の隣で寝息を立てていた。ちらつと時計を見る。7時。

昔の夢だった。あの時の事件の、夢だった。

% 5 (前書き)

歯が痛い

早く起きてしまった私は、ベッドから出る。ちょうど、東が壁側だったので、東を起こさずに出れた。

服が汗でぐっしょりだった。べっとり肌にくっついて気持ち悪い。仕方なく、私はベッドに背を向け、服を脱ぎ捨てる。

「んっ！ふう。っむ？」

肌着が引つかかったりして思うように脱げない。力任せにグイッと引つ張る。……やっと脱げた。地面に落とすと、ぺとつと音がした。下も同じように脱いだ。

脱いだはいいけど寒い。凄くとかまではいかないが結構寒い。体に汗がまだ付いていたので余計に体が冷える。拭くもの無いかな？東に聞こうつと。

私は東の隣まで移動して、東の体を揺らす。東が「むう」と言いながら起きる。

「何だよ、まだフ、じ。……べバツ！」

「えっ」

変な悲鳴をあげて倒れる。そんな光景に私は間抜けな声でしか反応できなかった。東の顔がいつも以上に赤い。もう一回東を揺らす。

「東あ。なんか拭くもの無い？ねえ？」

「俺は何もしてない。俺は何もしてない。俺は何もしてない。したとしても中には出さない」

なんか呪文を唱えている。面白いけど、……早く体を拭きたい。

ねえねえと東を揺らしていると、いきなりドアがガチャと空いた。

お母さんが立っていた。お母さんがまあという顔をしたが、直後に笑顔になり

「邪魔だったかしら？でもさ、これだけ聞かせて？何ラウンド目？」と、獲物に食いつく勢いで聞いてきた。これに私は「え？」としか聴き返せなかった。すると、東が思い切り体を起こす。そして、お

母さんの方を向き、反論する。

「ばか！してねえよ！！」

「じゃあ、じゃあ、なんで椿ちゃんは裸なの？」

「し、しらねーよ！」

「椿ちゃん。気持ちよかった？」

気持ちよかった？えっと、東と寝るのは気持ちよかったけど。……
これでいいんだよね？

「うん」

悩んだ末に、頷く。お母さんの顔が満面の笑顔でそうそうかと呟いた。

「えっうそ、お、俺やってねえよな？おれやってねえよな？」

「椿ちゃんがこう言うんだよ。女の記憶は正しいからね」

東の顔が見る見るうちに青ざめていく。あ。泡吹いて倒れた。

「あらあら、うちの子ったら、メンタル弱いわねえ。わざとだったのに」

お母さんがふうとため息しながら言い、私の方を見る。

「椿ちゃん、この様子だとやってないんでしょ？」

何を言っているのか分からない。私は「ん？」と聞き返した。

「なるほどね。予想はしてたけど、椿ちゃんは清純ね。ふふっ。やっぱりかわいいわあ」

「あの。さ、寒いんだけど……。服、無い？」

汗が乾いて流石に寒くなってきたので、お母さんに聞いた。お母さんが、あつという顔になる。

「あら、そういえば、服が無いわね。その、椅子に掛っている東の服を着たらいいわ」

「うん」

私は、その服を取って着る。結構ぶかぶか。ちよっと、東のにおいがした。下着が無かったので、長袖Tシャツ一枚の状態になる。股がすーすーする。

「きゃあああ！ かわいいいいい！ 服ぶかぶか幼女！ 下着なし！

キタコレ！」

お母さんが大きな声できゃーきゃーと喚きながら体をくねくねさせている。なんだか、気持ち悪い。

「流石に、その状態で外には出せないわね。狙われるわ！ 私が今日、買ってくるね！ ふふっ。何処のコスプレ店に行こうかしら。ふふふふ」

騒いでたと思いきや、いきなりにやけながらそう言ってきた。凄く目が輝いている。

「う、うん。なんだか分からないけど。うん」

「よっしゃ！ 買いにいつたるで！ やっはー！」

お母さんはそういうと、さっそうと出て行った。でも、寒いには変わりがない。……仕方ない。使っておこう。

私は手前にかざす。すると、小さな魔方陣のような円の中に色々な記号が書いてあるものが出た。それで、私の体の表面から数ミリ単位で、周りの空気の性質を暖かくなるように変化する。過ごせなくはない温度になった。さて、お母さんが帰ってくるまで何しようかな。

私は周りを見渡す。興味を示すものがいっぱいあった。ちらつと東を見たが、まだ気絶している。とりあえず、東の隣に行き、揺さぶった。

「東あー起きてよー」

「おれはあーおれはあー」

起きない。凄くうなされながら気絶している。これは、しばらく起きない。仕方なく、私はリビングでテレビを見ておこうと思い、部屋を出た。時計を見ると9時を回っていた。

%6(前書き)

やけどしました。

10時過ぎた頃、ドアがガチャリと開いた。私は振り返り、ドアの方をみる。結構厚着したお母さんが、紙袋を二個持って立っていた。「お金忘れるとか、ないわー。でも、私の小づかいで欲しいと思っただやつ買えたし。よかったわ。ふへへへへ」

すぐくニヤつきながら、その紙袋をテーブルに置く。何を買って来たんだらう。

私はその紙袋の中身を見る。中にも袋があり、それに書いてある文字を読む。

「ヴィクトリアメイド？」

「そう！ヴィクトリアメイドよ！かわいいわあ。後編パン」

また、お母さんは体をくねくねさせ、笑顔になっていた。やっぱりこの姿には慣れない。

私はお母さんをちょっと冷たく見る。すると、お母さんが自分の体を抱き、体を震えさせながら

「ああん！椿ちゃんのジト目いただきましたあっ！やばい！イク！」と、言った。何を言ってるのかが分からないけど、なんだか危ない雰囲気かむんむんと立ち込めているのは、なんとなく分かった。

「……これ、どう着るの？」

私は中身を取り出し、お母さんに見せながら言った。お母さんはそれを手に取り、袋を開ける。

「じゃあ、私を手取り、足取り、教えてあげるね」

「お、お願いします」

今わかったことでもないが、やっぱり私はお母さんが苦手なようだ。嫌いではないけど。

その後、お母さんにそのヴィクトリアメイド服を着せてもらった。サイズは私にあわせており、ぶかぶかでもないしきつくもなく。でも、結構こわこわする服だった。

「や、やばい。脳汁ダダ漏れだわ。襲いそう」

お母さんが着せ終わった私を見てそう呟く。目が獣になっていた。凄く怖い。ガチャリとリビングのドアが開き、そこから東が独り言を呟きながらリビングに入ってきた。

「俺は、やってないんだ。そうだ、俺……は……つ、椿おま。その格好」

「え、えへへへ」

東が入るや否や私を見て硬直する。私は情けない声を出しながらちよつともじもじとしてみた。すると、東は「べばっ！」と叫びながら即倒する。私も突然のことだったので「ええっ!？」という反応しかできないでいた。

「Hevenはここにあった。そう、ヘヴンは……がくり」

「ちよつと！東!？」

私は東を揺さぶったりする。東はさっきと同じように、ブツブツと同じ言葉を繰り返していた。

「やっぱり、メンタル弱いわねえ」

お母さんがふうとため息をし、そのまま台所まで行く。私はもう一度、東を揺さぶってみる。すると、すくつと東が立ちあがった。心配するので声をかける。

「だ、大丈夫?」

「ああ。もう、大丈夫だ。問題無い」

何故か、キリツとした顔でそう私に答えた。本当に大丈夫かな。

「朝ご飯するよー」

「はい」

「えっ?」

聞き覚えのない言葉に変な声で反応する。東はお母さんの言葉を聞いた後、テーブルの方に向かった。えっ。朝ご飯って何?朝にご飯を食べるの?

依然と私はその場でお母さんを見ながら硬直した。お母さんがなにやら具が乗ったお皿を上手いこと三つ持ちながらこつちに歩いてく

る。

「どうしたの？椿ちゃん」

「え、いや。何でもない」

硬直したお母さんが私に不思議そうに問いかけてきた。私はその問いに対して言葉を濁して答えた。そして、私も東の隣に座る。なんだろ、何が出るんだろう。

目の前にお皿が置かれる。パンにサラダ、卵がくずくずになった物、肉。が乗っていた。

「わああ！」

「おお」

東と一緒に情けない声が出た。でも、おいしそうだったので思わず声が出たというかなんというか。すると、お母さんがわなわなと震えている。え、どうしたんだろう。

「も、もしかして。あつちじゃ朝ご飯無かったの……？」

「う、うん」

事実だったので頷く。と、お母さんが涙をぼろぼろと流し出した。

えっ！私、なんかした！？

私は東の方を見る。東も驚いている顔だった。なんでっ！？

「うう。そんなに酷かったのね。でも！もう大丈夫よ！おなかいっぱい食べなさい！」

「え、ええっと。……はい」

お母さんはそう言って私の手を握る。ちょっと照れくさい。私は東を見ると、真剣な顔で

「椿。もしかして、昨日の夕飯の時騒いでたのって」

と、聞いてきた。私はその質問に頷く。昨日の夜ご飯は「からあげ」というものだった。凄く美味しくて、その時に騒いでした。お母さんが手を離す。

「あんなおいしい食べ物初めてだったんだもん」

「そうか」

東はそういうと、箸で肉をつまんだ。そして、私の口の前まで持つ

てくる。

「ほら、あーん」

「あーむっ。むぐむぐ」

私は「箸」が使えないので、東に食べさせてもらっている。昨日はお母さんがまた、かわいいー！って喚いていたけど、今日は喚かない。……うん、おいしい。

「どう？おいしい？」

「うん。おいしいよ」

お母さんが聞いてきたので即答する。お母さんはにっこりと、ほほ笑んだ後自分の前の料理に、手をつけ出した。東は自分のものを口に運びながら、料理をつまんで私の口に持ってくる。うむ。おいしい。

そして。お父さんがこの後帰ってきた。

%7 (前書き)

連続投稿

時計を見ると、2時を回っていた。私と東はテレビを見ている。お母さんは本を読んでいるし、お父さんは寝室で寝ている。お父さんは夜勤だったようだ。

テレビで、昨日見た「ドラマ」というものの続きを見ている。結構面白い。でも、だんだん眠たくなってきた。

「ふあああ……」

のんびりと欠伸が出た。目に涙が浮かぶ。東が私の涙を手でぬぐい「眠たいのか？」

と、聞いてきた。私は「うん」と頷く。

「でも、まだ起きていたい」

「そうか」

東はまたテレビの方に顔を向けた。私も一緒になってみる。

このドラマの内容は二人の愛の話というものだ。東に教えてもらった。見ていて、結構面白い。けど、だんだんと眠たくなってくる。

「ふあああ」

二度目の欠伸。私にはこの手の話が苦手らしい。凄く眠たくなるから。東がもう一度聞いてきた。

「大丈夫か？」

「うん」

私は頷いて、テレビを見る。すると、ぱっとテレビの画面が変わる。

「ニュース」のようだ。

「緊急速報です」

ニュースの人はそう言いだした。その後、ごちゃごちゃと紙を入れ替えたりと忙しそうにしている。

「なんだろ」

「なんだろうね」

私と東が一緒になって呟く。お母さんもテレビを見ている。落ち着

きを見せた所でニュースの人が

「まず、現場との中継が繋がってます」

というと、また、画面が切り替わる。会見場と書いてあった。

そこには、一人の男性が中心に立っていた。男性は紙を持ち上げると

「まず、日本支部の皆様にはお詫びを申し上げます」

と、切り出した。なんだろ、お詫びって。

「私たち、支部長のミスにより、数日前、監獄からの十数名の脱獄を許してしまいました」

この言葉に私の胸がどきんと跳ね上がる。ま、まさか。言わないで。言わないで！

「もう、数名の捕獲は完了しています。ですが、まだ完了していない物たちがいます。今をもって、それたちを指名手配にします。今からリストを公開します。これらに覚えのある方はすぐに連絡をください。捕獲に向かいます」

読み終えた後、テレビでは、やじがいつぱい飛び交りだした。そこで、ニュースの方に戻り、リストが公開される。

私は言葉が出なかった。何が何でもいきなりすぎる。リストに私の元名。いや、元番である「No.2045」と、ともに私の特徴が書かれる。そう、私は……

「指名手配」された。

言葉が出ない。ただただ「嫌」という単語が口から洩れる。なんで、なんで。なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで……

もっと過ごしたいよ。彼と共に、一緒に過ごしたいよ。どうして今なの。ねえ。

不意に誰かに抱きつかれた。私はそこで我に返る。抱いていたのは東だった。私の目から悲しみの象徴が流れ出す。

「なんで、なんでなの。なんで今さらなの。もっと過ごしたい

よ。もつと」

嗚咽と共にそんな声が出る。私はここで、今までの幸せだった時間が、崩れ去っていくことがわかった。

「大丈夫、誰が椿を差し出すもんか。誰が、俺の愛する者を手放すもんかつ！」

東からも嗚咽が漏れている。私からだとお母さんが見えないが、お母さんの嗚咽も聞こえた。

そして、お父さんも険しい表情で慌てて出てきた。

「まさかばれたのか!？」

「う。うん」

泣いているせいで、上手く言葉が出ない。だけど、涙が止まらない。「くそつ。書類の処分はさせたはずなんだがつ」

そして、お父さんは荒く携帯を取り出し、どこかにかける。

「ああ、俺だ。書類はちゃんと処分しただろ?ああ、それだ。……

お前も驚いているのか。そうか。……仕方ない。お前に託そう。この子たちの運命。……お前は、いつも壊す側だった。たまには守れっつんだ。レッドキャットとして……託すぞ」

お父さんはそういうと、おもむろに携帯を切った。何の話をしているのかがわからなかった。お母さんが、お父さんに問いかける。

「レッドちゃんに任すの?」

「ああ。あいつならやってくれる。……俺たちにはどうしようもないことだ」

そして、お父さんは私の肩をがしつと掴んで

「……東といっしょに逃げろ」

と。私はそれに首を横に振る。いや!逃げるならみんなでないといや!

「もつ、それしかないんだ」

「嫌……」

「親父たちはどうなるんだよ」

私の言葉をかき消すように東が聞く。その言葉にお父さんが首を横

に振った。

「私たちも、多分「異端者」を保護した身として、排除されるだろう。でも、君たちが生きているんなら私は死んでもかまわない」

……そんなこと言わないでっ！一緒に逃げたいよ！

そんな私の心の声は外に出ず。代わりに東が

「そんなこと。言うなよ。一緒に逃げたらいいだろ」

「もう、いいのよ、私たちも実質犯罪者だしね」

お母さんが答えた。犯罪者ってどうということ。お母さんたちは何も「罪」を犯してない！

すると、テレビで私たちの家が映りだされる。家の前には、兵士のような格好をした者たちが、並んで構えていた。

「もう、時間が無いのよ」

お母さんがそう言った。

% 8 (前書き)

ねむいですしおすし

「もう、時間が無いのよ」

お母さんが私にそうなだめる。だけど、離れたくない。せつかく、幸せになれたのに。

「椿ちゃん。東を頼めるか」

お父さんの頼みに私は首を強く横に振る。お父さんが私に頼んだのは、私の力を知っているからだとはわかってる。

すると、東が私の前に出る。東の目が見えた。怖いほど、目が据わっていた。

「親父と母さん。……死なないよな」

「さあ」

「生きれるようには、がんばる」

二人それぞれの答えを返した。東はその言葉を聞いて、「そうかと自分で頷いて、私の方を見る。

「逃げよう」

「嫌だあつ！」

即答で叫んだ。こんな嘘だ！ 東が、お父さんとお母さんを見捨てるわけがない！

「椿ちゃん」

お母さんが私の肩をがしつと掴む。顔はほほ笑んでいるものの、目は死ぬことを悟っていた。

「あなたたちには生きていてほしい。私とお父さんの気持ちを受け継いでほしい」

私は動けないで、お母さんの目をひたすら見つめていた。どうして、どうしてそんなことを言うの？

お父さんが私の頭をなでながら

「幸せの家庭を築くことだよ」

と呟いた。お父さんの目も、お母さんと同じだった。嫌だ。離れた

くないよお。

初めて、親というものをもった私にとっては、離したくない。目から涙が流れる。二度目なのだが、枯れを知らないのか、どんどんあふれてくる。

「東。椿ちゃんを」

「……ああ」

お母さんがそう言うと、東が私をくいっと引っ張る。

「椿。逃げよう。ここから」

「いやだあ」

私は駄々をこねながら、東に訴えかける。だけど、思いは届かず。

東はお母さんとお父さんに言葉をかける。

「また、会えたらいいな」

そして、私の手を引っ張り、窓の方へと行く。離れていく。お母さんとお父さんが。いやだ！ 離れたくないよ！ どうしてなの！？

東！

私は東をきつと睨むように見る。だけど、東はお母さんたちに背を向けながら、……泣いていた。

やっぱり、東も離れたくないんだ。でも、どうして離れるの？

「椿」

不意に東が口を開く。東の涙声に、私は黙ってしまふ。

「俺、立派かな」

そんなのわからないよと呟きかけたが、口をつぐみ、頷く。この気持ち、私だけじゃないんだ。

あなたたちには生きていてほしい。そんな、お母さんたちの言葉を胸に私は東と一緒に外へ出た。

後ろの塀を乗り越えて路地に出た。何故か、こちら側には誰もいない。私たちはお互い手を繋ぎ、走り出した。早く、遠くへ。

「居たぞ！ 追え！」

後ろからそんな声が聞こえる。早くも見つかった。

「早く、ビル街に逃げたら路地裏で逃げれる！」

東がそう言つて、私の手を引き、リードする。私は頷き、東に合わせて走る。

曲がり角を曲がり、蛇行しながら逃げる。

「はあっはあっ」

東の息が上がってきた。私も息が荒い。

「ここからは行かさないぞ！」

目の前に突然3人の兵士が現れる。私と東は立ち止まる。もう少しでビル街なのに！

「さあ、大人しくしてもらおうか」

兵士たちに銃を構えられる。……もう、使っしかないんだね。私は東の前で両手を左右に開く。

「おい、椿」

「大丈夫」

東が、私が庇っているのだと思い込んでいたので、なだめる。

『旋律』発動

私の両手に魔方陣のようなものが現れる。兵士たちは突然のことであっけに取られている。東も同様あっけに取られていた。

「旋律、Gun」

私はそう呟き、手の中に銃を形成していく。だが、普通では見ええない。私は手を、銃を握るようにし、兵士一人に向ける。

そして、引き金を引いた。

傍から見たら、それは只の銃のまねをしているだけに見える。けど、私は”引き金を引いた”。

「がっ」

すると、狙っていた兵士が、額から赤いものを噴き出しながら倒れる。

「ぐっ」

私はもう一度引いた。一人、胸からどす黒い赤い液体を出しながら

倒れた。

「ひ、ひいいい！」

最後の一人が倒れていく仲間を見て、私を悪魔を見る目をして銃を構える。

容赦なく、私は引き金を引いた。

悲鳴もなく、その兵士は、顔から血を噴き出しながら倒れた。

私は東の方を見る。東がわなわなと震え、私を見つめていた。その目は恐怖に満ちている。やっぱり、嫌われて当然かな。

だが、東は自分の頬を自分でばきつと殴った。

「えっ」

私は東の突然の行動に茫然としてしまう。そして、東が私を見て

「俺を殴ってくれ。お前に恐怖した俺を」

と、言いつつ頭を下げた。突然のことであたふたとする。

「き、恐怖なんて仕方ないよ。だって、私『異端者』だもん。それよりもさ、行く」

私は東の手を引いた。東はうんと頷いて、私に続く。

これから、何日逃げないといけないのだろうか。

私にはわからない。早く。早く、幸せな生活に戻りたい。そう願った。

%9 (前書き)

しんぶん

二人して息を荒らしながらビル街の路地を駆け抜ける。宛てなんてない。

兵士が追いかけてくる気配がない。私は後ろを見る。いない。

「少し休もう」

東がそう切り出した。私はうんと頷いて、止まり上を見る。

空が灰色に見える。

東を見ると、地面にへたり込んで肩で息をしていた。私も息があがつていたが、東ほどではない。

「大丈夫？」

「ああ」

私が聞くと即答で返してきた。私は路地の左右をみる。人の気配が無い。

早く、安全な場所に逃げないと。

私はそう思っていると、東が立ち上がった。

「行こう。この先に廃ビルがあるはず」

ふらふらとしていたので心配だったが、うんと頷いてその廃ビルへと歩く。

廃ビルが見えた。私と東は、やっと休めることに対する安心感でいっぱいだった。

不意に東が捕らえられる。

「がつ!?!」

東のそんな声が、後ろで聞こえた。私はすぐに振り向く。兵士に東が捕らえられてた。

「東つ!?!」

「動くな!」

「つ!?!」

私はぴたつと体を止める。東には、銃が突き付けられている。動いたら東が殺される！

兵士は全員で2人だったが、一人は東を抑えていて、もう一方は私に銃を向けている。非常に危険な状態だった。

私は夢中で叫んだ。

「東を離してよ！」

しかし、兵士は口元を少しつり上げて、

「だったら投降しろ」

と言った。もう、終わりなの……？

とりあえず、私は抵抗をしないという印に、両手を挙げる。

東は、私の行動に驚いている。

「ふっ。連れて行け」

私に銃を向けていた兵士は頷いて私に近づく。

その兵士に両手を、後ろで縛り上げられる。痛い。

そして、押されながら、私は連れて行かれる。

「樁！ 樁っ！」

「うるせえ！」

東が殴られた。東っ！

「あずまつ！」

「しゃべるな！ それ以上しゃべると撃つぞ！」

私は口をつぐんだ。東があ。東がああ。東が突然ぼそつと呟く。

「親父と母さんは？」

体がピタツと止まる。

「ああ、あの二人か。ははは、後で一緒の所へ、連れて行ってやるから安心しろ。お星様にな」

「っ」

兵士が小声でそう東に言う。東が目を見た。私も反応してその兵士を見る。

「うそでしょ？」

「ほら、さっさと行け」

私は後ろから押される。進みたくないのに進む。

「うそでしょ！？ ねえ！？」

「うるさい！」

後ろから銃で殴られる。

やだ。やだやだやだ。東が殺される……！

「ピンチかい？」

突然現れた青年に声をかけられる。本当に突然現れた。

「誰だっ！？」

二人の兵士が同時に銃を向ける。顔は印象の良いのに、それに見合っていない白髪と碧眼の青年は

「おっと、撃つなよ。そこらへんの青年なんだからさ」

「ならとつと引き返せ。こっちは手が空いてない」

その青年が旋律と呟くのを私は聞きのがさなかった。

青年が呟くと同時に兵士二人の体から火が上がった。

「ぎゃあああ！！」

「ぐがああああ！！」

それぞれの叫び声をあげ、悶える。東の上に乗っていた兵士は転げ落ちる。

自由になった東は私のところに駆けて来た。

「つばきっ！」

抱きつく。手が使えない私はされるがままだった。青年は私たちのそんな光景を見てにんまりとする。

兵士は、悶えた末に息絶えた。

「よかった、よかったあ」

東が私に抱きつきながらそう呟く。私は青年をみて、

「あ、ありがとうございます」

といった。正直、旋律のこととかを聞きたかったが、気にしないでおく。すると、青年はにっこ笑う。

「じゃあ、僕も連れてってよ」

その青年は笑ったまま言った。私と東は顔を見合わせ、そして、彼

を見て頷いた。

三人は一緒に廃ビルに入って行った。

% 1 0 (前書き)

眠たいエ

廃ビルの4階で、私はへたりと地面に座る。青年は立ったまま、影から外を眺めていた。東も私と並んで地面に座った。

私は青年を見る。見た感じ、髪と眼以外は普通の青年で、それ以外何にも変哲もない。だけど、この青年は確かに、旋律を使った。

「あの」

私がかからからの喉で声を出すと、その青年は私を見た。

「なんだい？」

彼はそう言つて、私の前まで来て、座る。東も彼を見ている。私は単刀直入に聞いてみた。

「さつき、旋律。使っていたよね」

「ありや、ばれてたか。ということは、君も『異端者』かい？」

「うん」

彼は、頭を掻きながらあははと笑った後、自分の胸に手を当てる。

「僕は『NO・2050』。異端者さ。使う旋律は『発火』」

「私は『NO・2045』。同じ異端者。使う旋律は『空気』」

「お、俺は東。い、いっぱん、じん……？」

私も一応名乗つておく。東は何が何だかわからない様子で、眼が私と彼を往復していた。まだ、東には異端者について、話していなかったことを思い出した。

東は戸惑いながら、私に聞いてきた。

「そつえば、旋律って何？」

「うーん、旋律よりも先に、異端者についてだよ。まず、何で私たちが異端者って言われているのは、その旋律が使えるからだよ」
私は東に説明をする。それに、東は真剣に聞いている。

「その旋律というのは、簡単に言つと、原子が集まって分子になるし、それが集まると物質になる。それと同じ要領で、物質はいくつもの旋律が、集まって一つの物質を形作っている。と、いう考えを

著した、ある学者がいたの。その、旋律が自由に扱える人が異端者」
「扱って、さっきの銃とか、炎とか？」

「うん。例えると、私の旋律は空気だから、ここの空気の旋律を組み替えて、暖かくすることが出来る。それに、空気の旋律を高圧縮することで、鈍器にもなるし、鋭利に組み替えると剣にもなる。旋律、s w o r d」

私は作りだした透明な剣を、近くに積み上がっている木に向かって投げる。木に剣が突き刺さり、切り傷が入った。

「こんな感じ」

「へえ」

東はいまいちわかっていない様子で、頷いた。すると、2050が話に割り込んできた。

「ちなみに僕の旋律は発火。水素と酸素とあと、摩擦とかによる物理現象の旋律を操れる。だから、発火だけっていうわけじゃないんだけどね」

「へえ……」

東の頭から、煙が上がっていたので、私は東を揺さぶる。

「あ、東？」

「んあ？あ、ごめん、全然わからんわ」

そして、ぷしゅーと音を立てて倒れた。一気に話し過ぎたのかもしれない。2050はそんな東を見て、けらけらと笑った。

「わからないのは仕方ないね。僕も正直よくわからないから」

「私も」

私もなぜか、やさしい顔になって東を見つめていた。東はう・う・と唸っていた。

2050は私と東を見比べている。私は2050に何？と聞いた。

「いや、お似合いのカップルだねって思ってたね」

「えっ」

「えっ」

私と東が二人して間抜けな声が出て、顔を合わせる。一緒に顔がゆ

るんだ。人から見てそう思われると、やっぱり嬉しい。

東は立ち上がって、2050を見る。そして、頭を掻きながら、聞く。

「名前ないんだよな」

「そうですね」

2050が即答した。それに、東はうーんと考え出す。きよるきよると周りも見る。

私は、とりあえず寒くなってきたので、旋律でこの階だけの空気を暖かくした。

丁度、外にはピンクの花が咲いている。東はそれをみて、2050を見た。

「お前の名前は、十月 桜だ！ よろしくな桜！」

「ありがとうございます」

東が命名すると、2050もとい、とづき さくらは深々と頭を下げた。東は花に詳しいのかもしれない。

「ん？ そういえば、暖かいな。11月なのに」

「私が暖かくしたよ」

東が聞いてきたので即答した。東は「ん？」と考えだし、少しした後、あつと声を出した。

「旋律？」

「うん」

私は冷たい地面に寝転ぶ。十分に外気で冷やされた地面は凄く冷たかった。でも、それよりも眠気が勝っている。

桜は影から、また外を見ている。外の空は赤くなっていた。

兵士は来ない。たぶん、一時的に逃れているだけ。

次は、何処に逃げようか。そう思いながらも、私はゆっくりと瞳を閉じた。

% 1 1 (前書き)

バイトしるどいどすしおすし

目が覚めたので、私は体を起こす。眼が半分しか開いていない状態で、周りを見渡した。東が私の隣で寝ている。桜はというと、座って外を眺めていた。

ぐっと伸びをした。外はまだ暗い。

東が少し私に抱きついていたので、起こさないように手を外し、桜の隣まで行く。桜は私に気付き、私を見た。

「もう起きたのか」

「うん」

私はそう答え、桜の隣に座る。外はビルすら光を放っていない。都市なのに。その異様な光景に眼を奪われていた。桃色の花が揺れている。

「椿ちゃんは生きたい？」

「ふえ？」

不意に桜が、聞いてきた。私は突然のだったので間抜けな声しか出なかった。あれ、椿って。

「名前は東くんから聞いたよ。いい名前だね」

「え、あ。えへへ」

なんだか照れくさかったので、そっぽを見る。それにしても、生きたい?……か。生きたい。生きたいけど、生きてどうしたらいいのだろうか。

「生きたいけど。わからない」

私はそう呟いた。桜は私に耳を傾ける。

「僕もそうなんだ。生き残っても、あとあと何をすればいいのかわからないよ」

私はというと、生き残ったら、まず、東と一緒に『学校』という場所に行きたい。それから、『結婚』して、『結婚式』を挙げて……お母さんとお父さんに見せれないなあ。お母さん、お父さん。

眼から涙が溢れてきた。やっぱり、兵士が言った通り、死んじゃったのかなあ。一緒に居たかったのに……。

すると、桜が私の頭を胸に押し当ててる。
「僕にも、もし手助けが出来たら、この胸を差し出すことが出来ますよ」

「ひくっんぐっ」

私の口から嗚咽が漏れる。おかあさん。おとうさん。会いたいよあ。私は桜の胸を借り、ひたすら泣き続けた。そうしているうちに太陽が上がってきた。

だいぶ落ち着いた私は、東を揺さぶる。

「東あ。朝だよあ」

「んあ？」

東が目を擦りながら体を起こした。まだ、眠たそうにしている。

私はぎゅっと東に抱きついた。

「うおっ。どうした椿」

「東成分補充中」

「ふふ。微笑ましいですね」

桜がほほ笑みながら、私たちの隣に座る。

私が抱きついてしていると、東は自分の体を臭った。そして、ちょっと顔をしかめた。

「臭くないか？」

私は東の体に、顔を押しつけて臭う。東の匂いがする。

「東の匂いがするう」

「それって汗臭いって言うんじゃ」

東はぐいっと私を押し返した。私はああと情けない声を出しながら東から離される。

「さて、次はこっちの方向に行きましょうか」

桜がそう言って、立ち上がる。東も賛成と言って立ち上がった。私も立ち上がったから、うんと大きめに頷いた。

私たちは、廃ビルを出て、桜の言った方向へと歩き出した。

% 1 2 (前書き)

^ p ^

私は東と一緒に警戒をしながらビルの間の路地を進む。桜とは、ビル街に入る前にわかれた。辺りに兵士の気配はない。

「この先の廃屋で落ち合うんだっけ？」

「うん」

後ろの東がそう聞いてきたので、私は頷いた。道は、ひたすらコンクリートの壁だった。そういえば、人の気配が無い。今日一回も見かけていない。おかしい。

「人居ないね」

私は、ビルの間から大通の様子を見ながら言った。東も一緒に見る。「確かに、なんでだ？」

「今日、避難勧告が出されたんですよ」

突然の女性の声。私と東はその方向を見る。路地の先から一人の女性が歩いてきた。

黒髪ショートで、10歳後半程度の女性は、私たちの10メートル先で止まる。

「避難勧告？」

私は警戒しながら聞き返す。東も警戒している。女性はニヤリと笑い、

「異端者がまぎれているからよ。『2045』」

その言葉で私はわかった。自分でも目が大きく開いたのがわかる。

この人、危ない！

東は私の後ろに隠れている。東は異端者じゃないから何もできない。女性は落ち着いた様子で腕を組む。

「ここじゃ暴れられないでしょ？ どう？一緒にダンスでも嫌だ」

即答した。女性は怪訝な表情になった。私はいつでも逃げられるように、東の手を握る。東も握り返してきた。

「最近の子は連れられないわね。いや、あなたの方が長いか。いいわ、ここで殺してあげる」

女性はその後、旋律と呟く。それと同時に、私と東は一緒に大通へと、走り出した。

「あいつも異端者かよ！」

「でも変だよ、何で狙われるの!？」

二人で一言交わしながら全力で逃げる。後ろから水のような液体が追いかけてきた。

大通りへと出る。慌てて、集合場所方面に向かう。水のそれは、私たちの後ろを横切つてビルにぶつかった。ドゴンと大きな音を立て、ビルに大きなくぼみを作る。

「私の旋律は『圧縮』」

素晴らしいながら、女性は水の中から現れる。私は構えた。でも、東を狙われたらおしまい。

「東、すぐ追いかけるから、先に集合場所に行つて」

「嫌だ。お前ばつかしつらい思いをさせたくない」

「行つて、お願い！」

私は東を見て、手を両手で握つた。東は、数秒間黙つてから、頷いた。女性は、遠目から私たちの様子を見ている。

「わかった。生きるよ」

東はそう言つて、私に背を向ける。

「うん」

小さく頷いて、女性を見る。少しいらだっている。後ろでは駆ける足音が、だんだん離れていく。

「最後の挨拶は終わった？」

「最期じゃない、再会のための挨拶だよ」

「再会は、叶わないわよ」

女性はそう言つて構えた。

•
•

% 1 3 (前書き)

私は目の前の女性に対して構える。

「旋律、s word」

そう眩き、空気の剣を作る。彼女は一つ、頭の上に大きな液体の塊を作った。

私は剣をぐつと握りしめる。そういえば、圧力と言っていたっけ。一応念のため、私の体の周りの空気の圧力を、一定に保つようしておく。

「さあ、ぎたぎたにやられなさい。悲鳴が好きなのよ。私は」

彼女がそういうと、塊から、数本の槍みたいなものが少しづつはみ出てきた。

そして、その槍たちが、私目掛けて飛んできた！

私は飛んできた槍を剣ではじき落とす。まず一本目。

「つつとう」

次の槍は足に飛んできたので、私は体を跳ねあげ、それを避ける。

さらに、分かっていたかのように、跳ねあげた体に目掛けて、二本の槍が飛んできた。

「つく！s word！」

私は速攻でもう一本の剣を生成し、二本とも叩き落とす。剣は空気なので重さ的な負担は無い。

「つ！？」

着地すると、最後の一本の槍が私の目の前まで来ていた。

体を無理に捻り、それを避ける。案の定もつれて左にこけた。

「防御ばつかしだと、イケないと思うよお」

私は体を起こしながら彼女を見る。彼女は腕を組み、平然と笑っていた。

「旋律、gun」

両手の剣を拳銃に変える。私は立ち上がって、彼女を中心に反時計

回りになるように走った。

「だからあ、にげてもお」

「おりゃあ!」

私は二丁の拳銃で、彼女目掛けて撃つ。

「っ!?!」

音が無かったが、彼女は私が何をしたのかが分かったようだ、彼女の前に液体の盾が出来る。そこに空気の銃弾が埋まった。しかし、彼女自身は驚いていた。

「なるほどねえ、遠距離もできるのね」

彼女はそう吹き、今度は、銃弾ぐらいの大きさの液体を、私目掛けて飛ばしてきた。

私は突然の攻撃にも屈指ずに、彼女を中心に反時計回りに駆け抜ける。

液体の銃弾は私の後ろを通りぬけていく。

「ていあ!」

もう一回撃つ。合わせて10発ぐらい。しかし、盾に守られる。

彼女の銃弾が止んだ。

私は、ぐっと、足にブレーキをかけ、立ち止まる。

彼女は口元をぎっとゆがめていた。

「何で死んでくれないの!?!」

「生きたいからだよ!」

即答した。もう、体力が少ない。次が最後かもしれない。

「旋律、long lance、short lance」

私は、槍をそれぞれ右と左で握る。

「空気の旋律は自由度が高くていいわね」

女性もその後、旋律と言い、液体の玉をパツと見、数10個作って宙に浮かした。

私の旋律は自由に何でも出来ても、同時に二つしかできない。

私は、長槍、短槍をぐっと握りしめて構えた。くる!

「行きなさい」

女性がそういうと、液体たちは私に向かって飛んでくる。

一つ目。私は長槍で切り伏せる。切った手応えが鉄だった。

二つ目は体をひねり、避ける。その液体は地面にぶつかると、がごとんと音を立ててめり込んだ。当たったら間違いなく死ぬ。

私は次々と迫りくる液体たちをどんどん切り伏せる。無理なものは避けた。

体を屈める。すぐ上を玉が通った。そして、体を跳ねあげ、飛んできた玉を切る。キリがない。もうすでに、30は切っている。

チラツと女性の方を見る。女性の後ろでは、玉がどんどん生成されている。キリがないわけだ。

着地した私は、短槍と長槍をしまい、すぐに長剣を作った。それで玉を切り伏せる。

そして、地面を蹴り、一気に間合いを詰めようとした。

ドゴツ

そんな音がした。痛い。何故痛い？ どこが痛い？

「がっ!？」

そんな声が出た。

背中が痛い。後ろからやられた。いったい誰？

跳躍していた私は地面を転がる。今まで私の居た所に玉があった。

そして、切り伏せていた玉が、復活している。早くに気付くべきだった。

「あら？ 終わり？ なら、死ぬっ!」

女性はそう言いながら、無数の玉を私に向けて発射する。

私は起き上がった。玉が目の前までに迫る。非常にやばい。

私の旋律は同時に二つしか出せない。その量を超えている。

もう、死んでしまうのかな。ふと、そう思った。

東、ごめん。私はそう呟いたのか分からない声で言い、目を瞑った。

私は目を覚ます。あれ、生きてる。

体を起こすと、さっきの大通だった。だけど、そこらじゅうにめり

込んだ跡やらがある。

さっきの女性は傷だらけで私のすぐ隣で倒れていた。まだ生きている。何で傷だらけ？

私は、女性の体を揺らす。女性は起きるなり、私を見て、恐怖でいっぱいになった情けない顔になり、私から遠ざかる。

「あ、悪魔！！」

女性はそう叫び、立ち上がったが、すぐ転んだ。私も立ち上がる。体中がきしむ。そして、女性に近づいた。

「ひいっ！く、くるなあ！」

女性はじりじりと地面を這いつくばりながら、私から離れようとする。

そして、泡を吹いて気絶した。

「何だったんだろう。……ほっというて大丈夫だよね？」

私は独りでにそう呟いて、きしむ体に鞭を打ち、集合場所へと向かった。

% 1 4 (前書き)

おなかすいた

集合場所の廃屋の前に着く。私はもう一度後ろを見た。誰もいない、さっきの女性もついてくる気配が無かった。

ガチャリと、私は廃屋の中に入る。

中は暗く、以外に小奇麗だったが、人がいないように思えた。だけど、そんなはずはないはず、東が先に来ているから。

電気のスイッチをカチツと入れてみる、が電気はつかない。

電気は無くても見えるので、とりあえず、

「東あ？」

と、声をかけてみる。だが、反応が無い。もしかしたら、寝ているのかもしれない。

とりあえず、私は廃屋の中を探してみる。入口近くの部屋に入った。その部屋も暗く、探しにくかったが、何も無い。

その隣の部屋を見る。掛け布団の捲れ上がった、ベッドだけだった。私の心臓がバクバクと音が大きく鳴りだす。だんだんと焦り始めていた。東、何処なの！？

次の部屋を見たが、何も無い。

次も……。

そして、私は、一番奥の部屋の前に来る。もしかしてという言葉が私の中を駆け巡る。

ドアノブに手をかける。中から、嗅ぎ慣れた鉄の臭いが漂ってきた。一気に開く。

「あつ……！！？」

言葉を失った。目の前に何があるのか、理解するまで数秒掛かる。

「な、んで！？」

その部屋はリビングだったのか、一番広く、その部屋の中で。

桜が腹部から引き裂かれて死んでいた。

上半身と下半身が別の所にあり、見る限り、死んでいるというのが

わかる。

その『物体』の周りに広がるように、赤い液体、血が広がっている。壁には、争って、飛び散ったように、血がこびり付いていた。部屋の中も凄く荒れて、炭になっている部分もある。

正しく、戦いがここで起きたようだった。……一体誰と？

ふと私は我に返る。そうだ、東は！？

その部屋の中心でぐるっと一周する。見つからない。死体すら。

「もしかしてっ!？」

私はだつとその部屋を出て、廃屋のドアを蹴り破った。外に転がり出る。

丁度、兵士の車が廃屋のすぐ近くから発進した。十分、東が連れ去られた可能性がある。

私はその車に走る。間に合って！

だが、そんな私も一人の人間。機械には勝てず、どんどんと離されていく。

「ああずうまあああ!!！」

そんな情けない叫び声を私は上げながら、私は走る。

見失いそうになる。だけど、距離は離される一方。

息がだんだんと荒くなっていく。待って！

足がきしむ。だけど、追いかけないといけない。私はぐつと歯を噛

み、走る。

しかし、その車は角を曲がった。

私も慌てて角を曲がる。が、その車はもう無かった。

私はその場にへたり込む。あずまあ……

十分な証拠はなかったが、ただ、それに東が乗っていると思った。だから追いかけた。

けど、その車を見失った。私は、何に生きればいいのか……。……

もう、疲れたよ。東は、一体どこにいるのお……

私はごろんと寝転ぶ。目から涙があふれてきた。

もう、昔のように、寝てしまおう。明日になったら、何かあるだろ

う。
私は、黄昏の日が差す近くの陰で静かに目を瞑った。

%15(前書き)

眠い(約3度目)

私は目を覚ました。知らない天井。そして、何故か私はベッドで寝ていた。

体を起こした。体中が痛い。周りを見渡す。

部屋は綺麗で、シンプル、小物が少ない部屋だった。どちらかというところ、男性の部屋という感じ。

ただ、その部屋には似つかわしくない、銃器がいっぱい置いてあった。

ガチャリ

ベッドの隣にあったドアが開いた。突然空いたので、私は体を張って警戒する。

そのドアから、見たことのある、人物が入ってくる。

「あ、起きたのか」

「あっ……」

震えて声が出ない。

赤髪短髪に赤眼という、普通ではない少女。頭からぴよこんと髪と同じ色の猫みたいな耳が生えており、腰のあたりからそれと同じ色の尻尾が出ている。それだけで、十分奇抜だった。

それらを省けば、普通の少女。しかし、その声は幼体に似合わず大人びている。

「久しぶりだな。椿」

その少女、しおざめっちは胸に手を当て、会釈した。

「なんで。何でっーが!？」

思わず叫び気味でそう聞いた。それに、っーは齒をギリッと噛みしめた。

「俺は、十五に言われたんだ。遅かったけど……」

相変わらぬの男口調でそう言った。とうとうって？

「とうとうって誰?それに、遅かったって」

「東の父親だよ。でも、お前一人しか見つからなかった」
「そうだ！ 東っ！」

「っ！ 東はっ！？」

私は慌てて立ち上がった、その部屋を出ようとする。
しかし、つーが私を抑えつけて制止する。

「くはっ！？」

「大人しくしとけ。お前の体が壊れる」

その体に似合わずの体重と力だった。

「あずまがあ」

また、私の目から涙があふれてくる。悔しい。あまりに無力だった。

「明日になってから動いていい。今日は動くな」

「なんでえ。私は、自分がどうなってもいいのに……」

それに、つーが少し力を加えた。いだっ！

「いだだだだ」

「お前が壊れて、東が喜ぶか？」

「っ！」

言葉を失った。私はいつも、私のことばかり考えていた。そのことが分かり、私は一層涙を溢れさせた。私は、あまりにも馬鹿だった。

「今日は大人しく寝ておけ。もし今、旋律を使って俺を殺そうとしてみる。俺も容赦はしない」

私は涙で揺れる視界の横でつーを見る。ゴミを見ている目だった。前と大違い。

「私は」

言いかけて口を噤んだ。何言っても、つーは動かないだろう。
すると、簡単にもつーが私の上から降りる。

「でも、旋律を使っても打ち消せるけどな。あははは」

さっきの目とは違い、軽快に笑いながら私の手を引く。そういえば、つーに関してまだ分からないことがあった。

「っーって、異端者？」

「んや？ちがう。でも、見方次第で異端者だね」
軽く返された。どうということ？

「どういう……」

「1世紀も生きてたら嫌になるよ」

1世紀とはどういう意味なのか。知力の無い私には、わからなかった。

「まあ、旋律は使えないけどね」

「あの時も、ずっと銃器使ってたよね」

「ああ」

そう、あの時。私とつーが出会ったのは、脱獄の時の事件。

すると、つーはひょいと二つの大きな銃器を片手で持ち上げる。

「俺も、生きている意味が無いのかもしれない」

その銃器をなでながら、つーは呟いた。

「私だって」

「お前には、東がいるだろ」

言葉を邪魔された。でも、確かに、そうなのかもしれない。でも、今はいない。

「今は、いない……よ」

「幸せは自分で掴み取るもんさ」

その銃器をおろしながら、つーは私の頭を撫でる。背がつーの方が小さいので少し背伸びをしていた。それにつーがくすつと笑う。

「成長してるんだな」

「うん」

私はつーを見る。全く成長をしていない。彼女はどんな存在なのだろうか、だけど私にはわからなかった。

つーはベッドの上に座り、ぼーっとベッドの壁にある窓の外を見る。この時も、何を考えているのかが分からない。あの時も……

「明日、俺も東を探すのを手伝う」

突然、つーが私を見た。私は体を跳ねあげてしまった。

「で、でも、兵士たちに連れ去られたんだよ」

「もしかしたら、……まだいる」

つーは柔らかな、やさしい笑顔になった。

「お前たちの幸せをつかみ取ってやるよ。お前たちに代わって、な」

% 1 6 (前書き)

^ p ^

私は目を白黒させた。どういうこと？

「て、手伝ってくれるの？」

「ああ」

「フーはそう言つて、ベッドから降りる。少し、にっと笑つた後、私の両頬をつまむ。いたたた。」

「いららららら」

「だから、ちゃんと寝る。それからだ」

「ねまふはら」

力が強いがために、とても痛い。やっと、頬から手が離れる。ひりひりする。

私は両頬を抑えながら、ベッドに座る。まだ眠たくない。

「まだ、眠たくないよ」

「はあ。しかたない、少しだけなら、話につきあつてもかまわん」
「フーは銃器を床に広げて、解体作業をする。手つきが凄く慣れている気がした。」

「そういえばさ、武器つていつも持ち歩いているの？」

「拳銃だけな」

即答された。私は一つ、拳銃を持ち上げる。片手だと、凄く重い。

「つく、おも、い」

「おーおー、置いとけ。怪我するぞ」

「フーがそういうと、私が持っていた拳銃をひょいと取られた。見た感じは凄く軽そうだ。」

その拳銃を床に置いて、フーがまた、口の長い銃の手入れを始めた。片手で支えたりと、見た目は凄く、軽そうなんだけど。

「フーが手入れをしている間、私は何か話題が無いか考える。」

「そういえば、フーに乗られたとき、凄く重たかった。」

「そういえば、フーの体重つてどのぐらい？」

「75キログラム」

即答された。キログラム？私には分からない。

……そういえば、前会ったときと、全然変わっていない。

「なんで、つーは変わってないの？」

「ん？」

「いや、つーだって、私みたいに成長すると思っただけど。」

つーが口に鉄の何かを咥えながら、反応した。私はつーの返事が来るまで黙った。

つーはそれを床に置き、私の方を見た。

「異端者だからだよ」

「それは分かっている。でも、私も異端者なのに、成長してるし」
私はつーの目を見る。その目から、悲しみ、憎しみ、その他の負の感情が見えた気がした。

つーが、もうひとつの銃に手をつけだした。

「俺はオリジナルだよ」

「オリジナル……？」

私は思わず聞き返した。つーはぐっと伸びをした後、その目で私の後ろの窓を見る。

「まあ、この戦いが終わったら、あいつのところに行かなくともな。100年近くもほったらかしだわ」

「……どうということ？」

「きにするな。ただの独り言だよ」

つーはそういうなり、また銃器の手入れをする。

どうということなのだろうか。私には分からない。でも、つーの考え
ていること、普通の人にも理解できるのだろうか。

そんなことを考えていると、だんだんと、眠くなってきた。

私は、ふかふかのベッドにこてんと倒れた。

薄くなる意識の中、

「おやすみ」

とつーの声がした。

•
•
% 17 (前書き)

「んっ」

そんな声が、私の目覚ましになった。うつすらと目を開ける。

目の前に、つーが寝ていた。何故か、私に抱きついて寝ている。がしつと男に掴まれたみたいに、動かない。

もぞもぞと私の胸に顔を押しあててきた。ぎゅーと抱かれる。少し痛い。

「はあ」

ため息を漏らして、私はつーの獣耳の生えた頭を撫でる。ぴくつと耳が動いた。

「ん？」

少し、髪を掻き分け、耳と頭の接点を見る。見事に繋がっていた。

「やっぱり、これ本物なんだ」

「んー？ ふああっ」

私がそう呟くと、つーが欠伸をして目を覚ました。

そして、抱いている腕を外して体を起こす。私も一緒に起きた。

「朝飯作るから待っててな」

つーがそういうと、ベッドから降りて、部屋を出た。

私は窓から外を見る。すぐ近くにビル街があった。

東……生きてる。よね？

私とつーは一緒に家を出た。つーは大きなケースを4個担いでいた。「とりあえず、俺は別に探すから、椿はこのビル街を歩き回ってくれ」

「う、うん」

つーはそういうと、そのケースの重さを感じさせない足取りでビル街の方へと歩き出す。

「ね、ねえー！」

その姿を見て、私は声をかける。つーは私の方を振り返った。生きていてほしい。

「……生きて。私と、東と一緒に」
「わかった」

私の言葉を遮るように、つーは微笑みながらそう答えた。そして、その姿が消えるまで、私は眺めていた。

ふと、空を見る。『雲』が一つもない青空だった。

私は女性の異端者と戦った場所まで引き返してきた。戦いの跡がそのまま残っている。あの女性はいない。

ここで、私と東は分かれた。それで……。また、じわつと目に涙が溜まってくる。

私はその涙を拭い、齒を食いしぼる。泣いてちゃいられない。

ぐるっとその場で回り、景色を左へと流す。そういえば、私が気絶する前には無かった傷が多い。それに、あの女性の反応。あれは、一体何だったのだろうか。

そんなことは置いといて、とりあえず、私は狭い路地裏に移動した。そして、女性に見つかった場所で立ち止まる。

大通に背を向け、その路地の左右を見る。そういえばまだ、女性が現れた後ろの奥に行ったことが無い。

私は奥に足を運ぶ。

かつかつと私の足音が鳴る。周りに音が無いせいで余計にその音が反響した。その反響で、私の気持ち焦り出す。東……何処っ？

かつかつかつかつ。とても長く感じられた。もしかしたら、ほんの短時間のことなのかもしれない。

少し開けた場所に出た。

「っ!？」

二度目の遭遇なのに慣れなく、驚いてしまい目を背けた。一瞬だったので分かったのは、目の前に『肉』が落ちていた。壁にはドス黒い血の跡、それに張り付く『肉片』。

私は、もう一度、それを見た。

その『肉』を中心に、赤いものが広がり、その赤いものがそこらじゅうに張り付いている。

しかし、頭部であろうものだけ綺麗に残っていた。

それで、その肉が何かが分かる。

……あの女性だった。

「っ」

言葉が詰まる。誰にやられた？　もしかして、他の異端者？　もし、その人たちに東が狙われたら？

「かわいそうな人」

「!？」

後ろからの突然の声に、私は体を跳ねあげさせながら振り向く。一人の少女が立っていた。いつから居た？　何故気付かなかった？

「その子も生きたかった。でも、殺された」

「だ、だれに……？」

その少女は紺色の長髪で、瞳も紺。前髪と後ろ髪の先端が綺麗に切りそろえられていた。

「さあ、誰だろうね。あなたのよく知っている人物でもあるし、でもよく知らない人物」

問題を出すように答えられる。

口元が少し歪む。私は警戒した。

「大丈夫よ、私は傍観者。戦いには参加しない」

少女はそう言っ、私を通り過ぎ、その肉の前に立つ。

「あなたは？」

私はその少女が不思議で仕方無かった。すると、私に振り向き、じつと見つめてきた。よく見ると、その目に光が無かった。

「それは、今は知らなくていい」

少女がそういうなり、突然少女の頭上に旋律の陣が出た。

その旋律は少女を飲み込むように降りる。

「ちよっ！」

「また、何時か会いましょう。2045もとい椿」

そういう言葉を残して、少女が消える。目の前には肉しか残っていなかった。

何だったのだろうか。一瞬の出来事で処理が追いついていない。でも、分かったのは、さっきの少女も異端者。

それよりも先に、東を探さないと。
私はその肉に目を向けず、さらに奥へと向かった。

東は何処なのだろう。

ふと空を見る。空が赤みがかっていた。

もう、このまま会えないのかな。

そう考えていたら、いつの間にか家まで帰ってきていた。

家には銃弾の跡があり、血の跡もある。ここで争ったことが一目了然だった。

私はその家の中に入る。廊下は荒れていて、黒くなった血がこびり付いていた。

そうだ。お父さん、お母さん。

そのままリビングに向かう。

兵士の死体が山積みになっている物にもたれかかって、お父さんとお母さんが肩を寄せ合い、手を握って眠っていた。

「あっ！」

私は急いで二人に近づいた。自分でも笑顔になっているのがわかる。そして、そのつないでいる手を握る。

「っ！！」

……冷たかった。知っている。この冷たさは。

お父さんとお母さんは死んでいた。

あまりにも生きているようにしか見えない。

「っ。んっくう」

涙が流れた。私は声を押し殺しながら泣く。お父さん、おかあさん。「ごめんね。ごめんね。私があ来てえ」

泣きながら、自分自身の存在を恨んだ。私が存在しているから、この二人は死ぬ羽目になった。

でも、泣いていてはいられない。東を探さないと。

私は歯をぐっと噛み、二人に背を向けて立ち上がる。目の涙を擦り取った。

「んっ。い、っできます」

二度と喋らなくなった二人を背に私は家を出た。

外に出ると、赤みが増した空が目に入った。

「ひくっ」

まだ、泣きたいと私の感情が押し寄せる。

私はもう一度ぐっと思えて、家の方を見た。
じゅりっ

そんな音が聞こえた。

私はゆっくりとその音の主の方を見る。

……東だった。

追い求めていた、早く会いたかった。

私の中の気持ちがいよいよ高まってくるのが分かる。

「あず」

言いかけた。

「旋律。knife」

どすつと自分の右肩に黒いものが刺さる。

「ま」

突然のことで私は言葉が止まる。その肩の物を見た。真っ黒のナイフだ。

震える視界で私は東を見る。東が笑っていた。その手には、旋律陣が浮いている。だけど、何で東が？

「あ、うあ……」

上手く声が出せない。訳が分からない。ナニガオキテイルノカガワカラナイ。

「やっと会えたね、椿」

まだ、起きていることがわからない。

なんで。なんで、なんで？

「あず、ま？」

目が見えた。笑っていなかった。

「さあ、俺はお前を殺す。お前はどつする？」

東の影から黒いものがゆらゆらと立ち込めてくる。その元には旋律陣があった。

「どついう、こと」

「まんまの意味だよ。俺はNo.2045という名の異端者を殺すだけ」

ぶんっ！

東がもう一度その影を飛ばしてきた。

「っ!?!? shield!」

その影は私の前で止まる。東は依然と表情だけ笑っていた。

「さあ、どつする？」

「……い、いやだ」

私は首を振りながら大きめの声で言う。いつの間にか肩のナイフが消えていた。

「言っただろ？俺は、N O . 2 0 4 5 という『物』を壊す、と」
「っ」

自分でも目が見開いているのが分かる。なんで？なんで東はそんなことを言うの？言わないよね？私が『物』だなんて。

ぐっと食いしばる。心の底に手を入れられてくる感覚だった。

「しっかし、馬鹿だよな。勝手に追い出して勝手に死ぬとかよ」

東は家の方を見ながらそう呟く。東が誰に対して言っているのかが分かった。

「やめて」

何も考えず、そんな言葉を私は発した。これ以上、何かを言われるのは嫌だ。

それに東はにやりと笑い、私を見る。

「お前もお前で馬鹿だよ。とっとと逃げればいいのに、俺を探すなんてな」

「だって、会いたかったから！」

私は今までで一番素直な気持ちを言った。しかし、東はくつくつと笑いだす。

「くつくつ。あはははは！！俺に会いたい？笑わせるな。俺は会いたくなかったんだよ！」

「……」

言葉が出ない。何でそんなことを言うの？もう、これ以上言わないで！

「お前なんてな」

「やめてえー！」

私は無意識に両耳を押さえながら叫び、しゃがみ込む。でも、東は平然とその言葉を発した。

「愛してなんていなかったんだよ」

ぷっん。

そんな音が聞こえた気がした。何か切れる音だ。

頬に大量の涙が流れ、頭痛が走る。一番聞きたくなかったことを言われた。

「正直、うざったかったんだよ。べたべたしゃがってさ」

ぷっん。

また、何かが切れた。

「あいつらもべたべた。もうやだよわ。いつそ死んでしまえって思ってたわ」

ぷっん。

私は叫んでいた。

「なんで!? 何で出会ったときに拒絶をしなかったの!？」

「おもしろいからにきまつてるだろぶちっ。」

私はよろよろと立ちあがる。もう、許さない。東を……。

きつと東を睨む。それに東が憐れみながら笑った。

「ほらほら、俺はもう準備できてるんだ。かかってこいよ」

私はぐつと拳を握る。そして、構えながら叫ぶ。

「ああああずううまあああ!!」

自分に東に対する憎悪が出てきて、だんだんと大きくなってくることがわかる。もう、嫌だった。

「つうばあきい!!」

東も構えながら叫んだ。

間合いが近い。

「旋律。dual sword」

「旋律。bow」

同時に旋律を発動し、私は剣を両手に握りしめる。東の手には漆黒の弓が握られていた。

「しねえ！」

その言葉と同時に、東は私に矢を撃ってきた。

私は地面を左に蹴る。

「っ!？」

がきっ。

しかし、矢は私の方へ軌道修正された。それを切り落とす。

着地をし、すぐに私は東へと踏み込んで近づく。

「てりゃあ！」

「sword！」

がきんと剣同士が合わさる。東の剣はやはり黒い。何だろう。

空いている左手で私は切りつける。

ぎっ。

黒い盾に防がれる。いつの間についた!?

私は後ろに下がって間合いを取る。

私が肩で息をしているのと対照に東は平然としていた。

「そんなものか。もう、終わらせてやろう」

東がそう言つと、後ろに黒い壁がでてきた。

「はあ、な、なにを」

やっと落ち着いてきた私は槍に切り替え、少し下がってそれを構える。

「八子の巢にしてやるよ」

にやりと不気味に笑った東は両腕を広げた。

「さあ、殺れ」

「っ!！」

その言葉と同時に、後ろの壁から先が尖った黒い棒みたいなものが沢山生え、私に襲ってきた。

まず私は体をひねり、それを避け。次に跳ねあげる。

「はっ。ぐっ」

がちつ槍で一つ宙で切り落とし、着地すると同時に襲ってきたそれを切り伏せた。

体を後ろに跳ねる。しかし、背後には黒い壁があり、衝突をして、地面に落ちた。

「がっ！？ くっ」

私はその壁を背に追いつめられた。黒いそれがいっぱい私に襲いかかってくる。

「shield!!」

最大の力で自分の前に大きな盾を張った。

がぎっがきゃんがちん。

黒い棒は、張った盾の軌道に沿って逸れる。

音が絶えずに盾から聞こえた。

「はあ、はあ、はあ」

だんだんと体力が消耗する。

やばい。非常に危ない。

盾の周りは黒一色になっていて、何が起きているのかが分からない。めきっ。

そんな音が聞こえた。

「っ！？」

棒の一つが盾に突き刺さる。もう一本、さらに二本と。

「ははは……」

もう、ダメなのが分かってきた。笑うしかできない。

もう一度、『愛してる』って言われたかったなあ。

私は目を瞑った。

しかし、なぜかだんだんと、自分の意識が削れてくる。なにこれ。

何故か分からない。けど、自我が失われていく感覚。

……そうだ、知っている。あの時の感覚。

ドスリ。

おなかに痛みが走る。とてつもない痛みだった。
「がっ!!」
その時と同時にぶつんと意識が飛んだ。

目の前に黒い空が映る。

私は倒れていた。何が起きた。何がどうなった。わけがわからない。確かに、私は東に刺された。

ずきっ

「くっ」

お腹に激痛が走る。刺されたのは本当だったらしい。

そっ、東。

私は体を起こした。血が溢れだす。

「がはっ」

口から赤い液が出て、それが地面に広がる。

私は周りを見渡す。

東は、すぐ隣で倒れていた。

とても傷だらけだった。でも、息はしている。

「あ、あずまっ」

体を揺らした。何が起きたのかを教えほしい。

「くっくっ。あははははは！！」

「っ！？」

東がいきなり笑いだした。私は警戒をする。

しかし、東はため息をつき、少し微笑んだ。

「俺は東じゃない」

「えっ！？ ぐっ……でも、あ、東だよ」

驚きで少し体を跳ねあげてしまって、おなかが痛み顔が歪んだ。

「東だけど東じゃない。さあ、殺せ。俺の負けだ」

「やだ！」

私は即答する。そんな！ 東を殺すなんて！

「さっき言われたのは。っゆ、許してあげるから、い、っしょに生きようよ」

「俺は。死にたい」

「殺させない!!」

がばつと東に覆いかぶさり、手足で自分の体を支える。私の血が東の体に浴びる。

「一緒にやなきやだ!」

だが、東は呆れた顔をした。なんで、そんな顔をするの？

「もういい」

ずぶり

嫌な音が聞こえた。私は恐る恐る東の体を見る。

「あ、あずまつ」

東の胸に黒い物が刺さっていた。東がげぼつと血を吐き、背中からは赤いものが広がっていく。

「最後にさ」

「最後なんて言わないでよ!」

黒いものが消える。

私はギョツと東を抱きしめた。生きたい! 一緒に!

「東はお前のこと愛しているらしいぞ」

「え」

上半身を少し離し、顔を間近で見る。東は静かに目を瞑ろうとしていた。

「寝ないでよ! あずまあ! いっしょにいきようよお!」

「じゃあな」

そして、目を瞑った。

「あずま? …… ねえ、起きてよ」

東は目を瞑ったまま動かない。ねえ、うそでしょ。

「あ、あず。あああああ!」

私は一心不乱に叫んだ。

「ねえ!! 起きてよ!! ねえ!! あずまあ!!」

目から大量の涙を流す。ねえ、あずまあ。

しかし、東はぴくりとも動かない。

その胸に顔を押しあてる。

「おきてよお。あずまあ。ねえ」

叫ぶたびに激痛が走り、私は声を出せなくなっていた。

「あず……ま」

何もできない自分が悔しい。ただ、こうして叫ぶしかできない私が悔しい。

でも、東は動かない。もう、うん。分かっている。

「んくっ。ひくっ」

泣くしかできなくなっていた。最後に私はぎゅっと抱きしめる。

だんだんと冷たくなっていく彼。私の体温も下がってきているのがわかる。

この世界で生きていても、意味なんてない。

私も死のう。

死んで東に会おう。そして、謝ろう。こんな私でごめんなさいって。

私は体を起こして座る。そして、剣を作って握った。

どすっ

もう、これでいいんだ。これでやっと死ねる。

そのまま東に覆いかぶさるように倒れる。

やっと行けるよ。あずまあ。ちゃんと、おかえりって言ってね。

私はゆっくり目を瞑る。

私は目を開ける。白い部屋だった。
ぴくぴくと規則正しく機械が音を出していた。
何処？

私の寝ているベッドの横につーが座っている。なんで？
その顔は悲しそうで、そうでもなさそうな。難しい顔だった。
「起きたんだな」

「ここは？」
「病院だ」

私は体を起こそうとする。体が悲鳴を上げた。

「ぐあっ」

「無理するな！」

つーに制止させられる。そうだ、東は！？

「東は！？」

「っ」

つーが言葉を詰まらせた。もしかして。

「しん、だ？」

「……ああ」

「うそだよね！？」

キツとつーを睨む。つーはぐつと唇をかんだ。

「お前が、よく知ってるだろ」

つーがそう言って、うつむいた。

「じゃあ」

その言葉につーが反応して顔を上げる。

「何で。なんで死なせてくれなかったの！？」
私は死にたかったの
に」

ばちん

そんな音がした。頬が熱い。

つーが立ちあがっていた。

「馬鹿言つな！ お前はな！ 東という一人の男を殺したんだ！
その罪はな、生涯そのもので償うものなんだよ！」

「生きてても……私はんぐつ！？」
つーに口元を片手で鷲掴みにされる。つーの目がまた、ゴミを見る目だった。

「おまえ、いい加減にしろよ。罪なんてな、一生生きてても償える代物じゃない。よく聞け、俺も罪人だ。今なお償い続けている罪人だ。俺は死ねない。だけどお前は死ぬる。でも、罪を背負い始めてすぐに死ぬなんてな、諦めてるのと一緒なんだぜ？ 死ぬならな、その生涯最後まで使い切って死ねてんだ。そんときに罪はな初めて償われるんだ。いいか、死ぬな。勝手に死ぬな。俺が許さん」
「でふお」

口が抑えられて上手く声が出ない。でも、よくわからないよ。私は、どうすればいいの？

「生きる。俺と一緒に。俺と一緒に罪を償ってやるよ」
手を離され、私はうつむいた。

そうすればいいか。私には分からない。でも、それが東に対しての償いになるなら……。

「分かった」

「あ？」

「わかった！ 生きるよ！ この私の命が尽きるまで生きてやる！」

「って、20年ぐらい前だっけ？ お前が言ってたよな」

「ははは、そうだっけ」

青い空。私は一人の少女、塩冷津と一緒に、お墓の前に居た。

異端者関連のごたごたはすぐに収まり、異端者にも人権が与えられた。それで、私は津と一緒に暮らしている。

私は空を見上げる。何も無い青い空だった。

「そつえばさ」

津を見る。津はお墓の前で、両手を合わせて目を瞑っていた。

「何？」

私も一緒に合わせる。

「本当の名前、知っているのか？」

「本当の名前？」

私は瞑った目を開けて津を見た。線香の良い匂いが漂う。

「俺が拾った資料に、書いてあったんだけどな。聞きたいか？」

「言いたかったらどうぞ」

お墓の方を見る。お墓には『森澤家』と書いてあった。

お供えには、饅頭とおかきが置いてある。

「本当の名前　　ってさ。」

津の言葉と同時に風が吹き、木々が音を立てた。

「ん？森澤　椿だつて？」

私の反応に、津がけたけたと笑った。

「いいや。まあ、そうだな。お前は椿だ」

「ええ。私は椿。それ以外になりえない」

私と津は立ち上がる。こうして並ぶと親子みたいだった。

「ははは。ずいぶん大きくなりやがって、男のプライドが傷つく

じゃねえか」

「若いつていいね。何で成長しないんだろっね」

私は津の頭をぐしゃぐしゃとする。

「や、やめっ！　これでも、女の子として考えてだな」

「やーいやーい。津がおこったー」

そのまま逃げるように、走って帰路につく。

「こらっ！？　まてやー！」

津も同様に私を追いかけてきた。

東。私ね、この命が尽きるまで色々見て来ようと思っ。

だからさ、私が償いを果たした時に、「おかえり」と「あいしてる」
って言ってね。

そしたら、私も「ただいま」と「あいしてる」って言うから。

そして、今まで見たものの話をいっぱいしたいからさ、二人きりで話そうよ。

だからそれまで、「行ってきます」

『いつてらっしやい』

「ん？」

私は空を見上げる。

「どうした？ うりゃっ」

津が私に抱きついてきた。もう、津の体重が見た目相応になっていて軽い。そのままおんぶをする。

「いや、東の声が聞こえたからさ」

「なんて？」

私はくすつと笑った。

「いつてらっしやい。だつて」

「じゃあ、俺も。行ってきます」

津をおんぶしながら歩き出す。

そういえば、さっきの名前。

「スカイ・ガリレイ……か」

「なんだ、聞こえてたのか」

「やっぱり、森澤 椿がいいや」

「ちがいない」

私と津はけらけらと笑った。

「 - N O . 2 0 4 5 - 終 」

%22(後書き)

1章終了です。

2章からは、別の名前で出すので、お願いしますが、でも、「罪」という名前は変えませんが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5924x/>

罪sai -No.2045-

2011年11月22日03時58分発行